



Title	2024 年度（春夏学期） 日本語15 実践報告
Author(s)	谷口（井手）, 恭子
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 54-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102681
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度（春夏学期） 日本語 15 実践報告

谷口（井手） 恭子

1. はじめに

本稿は、2024 度春夏学期の授業「日本語 15」の実践報告である。受講生は 2 年生の学部留学生 9 名で、出身別には中国 7 名、香港 1 名、ベトナム 1 名であった。

この授業では、質問等を通して論文を批判的に読む力を養い、卒業論文執筆及び将来の基礎となるような知識を身につけるとともに、知識を基に考察し、考えを整理することを目的とし、論文講読を行った。

成績評価は、授業への参加度、発表、論文講読の「論文まとめシート」、論文講読の発展活動により、総合的に判定した。

2. 授業の概要

授業の概要は表 1 の通りである。学習目標を①新聞記事や研究論文などを批判的に読むことができる、②日本語教育など各自の専門分野に必要な知識を増やすことができる、③日本語の高度な語彙表現を用いて、知識や考察が表せる、の 3 点とし、これに沿って授業を組み立てた。

2 回目は論文講読への足掛かりとして、質問に注目した授業を行った。3 回目以降は論文講読を行った。

表 1 授業概要

回	授業内容
1	イントロダクション
2	質問力トレーニング
3	論文講読（筆者が選んだ論文）
4-12	論文講読（受講生が選んだ論文）
13	論文講読の発展活動
14	論文講読の発展活動、春夏学期の振り返り

3. 授業の内容

ここでは、論文講読への足掛かりとして行った 2 回目の授業と、3~12 回目の授業内容を具体的に紹介していく。

3.1 2 回目：質問力トレーニング

論文講読には、批判的思考力を以て読み、質問や議論を通して理解を深め、考えを整理することが必要だと考える。その一助として、2 回目の授業で OPI (Oral Proficiency Interview) の手法を援用した質問力トレーニングを行った。OPI とは、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages : 全米外国语教育協会) が開発したテスターと被験者が 1 対 1 で行う会話能力テスト（山内 2005、p. 2）のことである。OPI では、被験者の会話能力測定のために質問の難易度を徐々に上げていくが、それには質問形式だけではなく質問内容の難易度も上げなければならない。質問内容の難易度を上げるには、その話題に関する多くの知識、話題を多方面から見る能力や批判的思考力が必要であるため、質問力に注目した活動は授業の学習目標に合っていると考えた。授業では、実際の OPI¹を例示し、「スポーツ」という話題について、好きなスポーツは何かという個人的な質問から、進学の際のスポーツ推薦の制度の是非という社会的な質問への質問形式・内容の難易度の変化を見せた。スポーツ推薦の制度の是非に関する質問で、テスターは被験者に意見を求め、その上で反駁していたが、被験者の意見の根拠の不明確な点を指摘することや、被験者と異なる視点や立場から意見を述べることは、批判的思考力を養う一つの方法として適していると言えるだろう。そこで授業では、受講生にもスポーツ推薦の制度の是非について意見を求め、筆者や他の受講生が反駁を行い、さらに仮定的な状況を設定した上でどのような質問ができるかを考えた。受講生は学生の立場として意見を述べていたが、スポーツ推薦の学生を受け入れる学校側から、またはスポーツ推薦の制度の社会的意義などに関する意見や質問がないことを筆者が指摘すると、受講生にハッとした表情が浮かんだ。この活動を通して、ある話題を多方面から見るという経験ができたのではないだろうか。

その他には、2025 年に開催される大阪・関西万博の新聞記事ⁱⁱを数種類用いて、ペアで意見交換や、質問・反駁を行う活動を行った。新聞記事は、万博開

催に肯定的なものも否定的なものもあったが、それらの理由を踏まえながらも、多様な観点からの質問を促したところ、歴史的、経済的、文化的、社会的といった幅広い観点からの質問がなされた。

3.2 3~12回目：論文講読

3~12回目の授業では論文講読を行った。3回目は筆者が選んだ論文講読を行ったが、論文は大学の授業支援システム（以下、CLE）にて事前に配布し、授業当日には発表レジュメを用意した。筆者は、近年ニュースや新聞などでも取り上げられることが増え、認知度が高まっている「やさしい日本語」をテーマとした論文を選んだ。受講生が持つ「やさしい日本語」に対するイメージや知識はそれぞれであったが、この論文における「やさしい日本語」の定義や論点等を理解し、記述内容に関するディスカッションを行った。筆者が選んだ論文は、論文の目的以外にも記述内容が多岐に渡っており、論文講読の初回に教員（筆者）が扱う論文としては適切ではない面もあったと反省している。しかしながら、受講生は論文の良い点及び疑問点や問題点についても指摘し、積極的に意見交換を行った。また、筆者からの「発展課題」として、受講生の出身地における「やさしい〇〇語」の存在や普及の状況について「論文まとめシート」に書いてもらうこととした。

4~12回目は、発表担当の受講生が興味のある論文を探し、発表レジュメを作成し、発表した。発表の際は、少なくとも発表の1週間前には論文をCLEにて共有すること、発表レジュメは発表までにCLEにて共有することを求めた。また、論文は、査読付きの「学会誌」「研究会誌」に掲載された研究論文、実践報告、調査報告から選ぶこととした。査読付きの「学会誌」「研究会誌」の例としては、『日本語教育』、『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』、

『異文化間教育』などを紹介した。発表担当以外の受講生には、事前に論文を読んでおくことを課題とし、授業後には論文の要約、コメント、疑問点・批判、クラスにおけるディスカッション及び自分の意見、今回の論文を起点に考えた発展課題を記すための「論文まとめシート」の提出を課した。この「論文まとめシート」は予習の際にも、コメントや疑問点を書き込むために用いることができる。

この授業の目標の2つ目は「日本語教育など各自の専門分野に必要な知識を増やすことができる」で

あるが、筆者は、受講生が2年生であり、この段階では専門的な学びに限らず、様々な学問分野から幅広く学ぶことにも意義があると考え、論文の分野は指定しないこととした。その結果、受講生が選んだ論文は日本語教育学、日本語学、認知言語学、日本文化学、死生学など、多様な分野からのものであった。

発表担当の受講生は、自分が作成したレジュメを用いながら、その論文を選んだ理由、論文の概要、コメントや疑問・批判等を発表した。他の受講生もコメントや質問を行うことで、発表者にとっても新たな気付きがあり、全体として論文への理解が深まっていたようであった。授業では9名の受講生が順番に論文講読をしていったわけであるが、回数を経るにつれ、論文の理解をより深く導く工夫が見られるようになった。例えば、発表論文の理解の肝となる先行研究の一部も紹介する、発表論文で引用されている参考文献に当たり概要を紹介する、発表論文での多くの図をホワイトボードにわかりやすく図示する、発表論文において使用された研究方法に関する追加情報を伝える、などの工夫である。

また、発表を聞く受講生も、論文講読の能力が上がっている様子が見て取れた。筆者が顕著に感じたことをいくつか挙げる。まず、論文の論理の一貫性により注意を払うようになったことである。その論文の中心的テーマではない文章の細部を問うことに時間を費やすなくなった。次に、データの見方が慎重になったことである。データが表す事象を見る際に、データに現われていない事象についても時代背景等を含めて議論・考察を行うことができた。それから、研究方法、調査方法に関する学びもあった。具体的には、「ライフ・ストーリー」のような質的研究のいくつかの手法について知識を得、受講生の今後の研究に具体性がもたらされたことである。

4. 受講生の反応と今後の課題

最後に、受講生の反応と今後の課題について述べる。この授業は通年授業であるため、春夏学期が終了した時点では大学からの授業評価アンケートが行われない。そこで、筆者はGoogle Formsで簡易アンケートを作成し、受講生にアンケートへの協力を依頼した。質問項目は、①授業は授業目標の達成を踏まえて行われていたと思うか、②授業の目標以外にどのようなことを学びたいか、③その他自由記述、

の3項目とした。全受講生から回答を得ることはできなかったが、得られた回答の内容を記す。質問項目①については、授業は授業目標の達成を踏まえて行われていたという評価を得た。論文講読と「論文まとめシート」への記入を繰り返すことにより批判的読解を行う練習が積め、口頭でも記述でも高度な日本語力を用いて考察を行う機会となったのではないかと思う。質問項目②については、「具体的な研究方法の立て方を学びたい」という回答があった。秋冬学期の授業では研究計画を作成する授業もあることから、この授業で得た知識を是非実際に活かしてほしいと思う。質問項目③では、「論文講読の流れにおける「発展課題」という考え方を初めて知り、経験したが今後に役立つ」、「他の受講生の関心があるテーマを知り興味深かった」、「他の受講生の意見を知った上で、再思考ができた」、「他の受講生の質問の仕方から観察できるものがあった」という記述があった。論文講読への取り組み方がより能動的になり、ピア・ラーニングを通して、受講生が新たな知識を得たり、自らの思考を問い合わせ直すことができたことは、筆者にとっても大変嬉しいことである。一方、予習・復習に用いた「論文まとめシート」には「要約文の字数指定があったらよかった」という記述もあった。確かに論文の要約方法や字数は受講生によって差があったため、負担感の公平さの担保のた

ⁱ 日本語OPI研究会「OPIを授業に生かす第3回」
<https://www.opi.jp>（最終閲覧日2025年1月30日）

めにも、ある程度の指示は必要だったと思われる。次回は指示の方法を考えたい。また、日本語専攻の分野ではない論文を読むことに否定的な記述もあった。どの論文を授業で扱うべきか、受講生の意見も聞きながら再考する必要があるだろう。今後は課題の指示といった実務面にも注意し、実のある授業となるよう考えていきたい。

【参考文献】

- 庵功雄他 (2019) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』
ココ出版
- 庵功雄編 (2022) 『「日本人の日本語」を考える：ブレイン・ラシゲージをめぐって』 丸善出版
- 伊藤奈賀子他 (2023) 『ピア活動で身につけるアカデミック・スキル入門』 有斐閣
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』 せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』 せりか書房
- 山内博之 (2005) 『OPIの考え方に基づいた日本語授法—話す能力を高めるために—』 ひつじ書房
- 八木真奈美他 (2021) 『質的言語教育研究を考えよう リフレクティブに他者と自己を理解するために』 ひつじ書房

ⁱⁱ 例えば、毎日新聞（2024年3月9日）「海外館建設 輪をかけて困難に？万博400日前、立ち上がる『壁』」など